

【論文】

広場恐怖症の日本人：日本人の空間センス

加藤 孝義（岩手大学名誉教授）

私の研究テーマは視覚を中心とした認知心理学であるが、この研究の焦点を空間認知に絞って進めてきた。伝統的な課題なのでテーマも多様で、個人の扱い得る能力をはるかに超えているなど実感しながら、これらの研究成果は岩手大学の紀要「アルテス・リベラレス」に投稿し続けた。しかし話題があまりにも専門的過ぎて、読者は極端に限られていたと思える。『空間のエコロジー』を出版した 1986 年頃になって、研究課題の枠を広げてみると、空間認知の問題は社会や文化との関連が浮き彫りになり、異文化の視点からみても広範なそして多様な課題と関連していることに思い至った。そのような文脈からみた一つ的话题を今回は紹介しようと思う。

* 広場恐怖症の日本人

韓国は梨花女子大学教授であったイー・オリョン（李御寧）は、『「縮み」志向の日本人』（1982）を学生社から日本語で出版して、日本人の広い空間への恐怖感を以下に示すように述べている。

日本人が「広がり」に弱いということ、すなわち、「内」から「外」に出た場合、どんな状態になるのか。この好例としてよく引用されている日本人の例として、彼も三島の自叙伝『わが狭き島国』（Mishima, Sumie, Seo, My Narrow Isle, 1941）を引用している。三島はアメリカのウェルズリ大学に入学したが、大学で一体どのように振る舞ったらよいのか一向に見当がつかない自分自身に対して、またこのような環境に対応できない日本の教育を受けてきたことに対して憤りさえ感じたという。

三島は、アメリカにいる中国の女性たちと比べ、日本の女性たちの行動が決定的に違っていることを知って愕然とした経験を語っている。彼女によれば、中国の女性たちは、日本女性には見られない落ち着きと社交性を持って、例外なく王者のような優雅さを見せ、世界の真の支配者のごとき趣で行動し、世界中で最も洗練された人たちに見えた。このような中国女性のものおじしない態度と、堂々とした落ち着きぶりは、日本の女性たちのたえずおどおどした、過度に神経質な態度と大変な対照性をみせていたことにショックを受けたのである（『菊と刀』長谷川松治訳、1972）。

イー・オリョンは、「小さな植木鉢」の盆栽の松が、庭園に置かれた時には美観を備える芸術品であっても、それを広い大地に移し植えた時には、その美と特色を喪失するという喩えにこそ、広い空間に対する日本人の特徴の問題の核心があると指摘している。

このような「外への広がり」に弱い日本文化の素顔が日本の対外的な歴史に反映されているのだという。例えば、なぜ豊臣秀吉が文禄・慶長の役で大失敗したのかについて、イーは次のように分析している。秀吉は明を制服できるとの確信をもって、北京占領を既定の事実とまでみていて、綿密な事後の企画さえ立てているほどの人物であるのに、なぜ失敗したの

か。秀吉の戦術、実戦経験、そして卓越した外交に成功して天下統一を果たしたほどの太閤秀吉は、北京どころか釜山にさえ上陸できずに敗戦したのはなぜか。太閤秀吉のこのような勘違いを裏書きするものとして、朝鮮に渡った当時の日本軍が、朝鮮の広いことに胆を潰したことをあげている。毛利輝元が星州の陣営から送った手紙に「さてさてこの国の手広きこと、日本より広く候ずると申す事に候」とあった。朝鮮は日本より広いはずはない。けれども、「内」から「外」に出て、未知の空間におかれた日本の軍隊は、すぐに「広い」と思ってしまった。このような認識をもった時点で、もう戦争に敗れてしまっていたのも同然だということになる。「広い」というのは、「どうふるまったらいいのか」「見当のつかない」行動のパターンと方向の感覚が全く狂ってしまう事を意味する。

イーによれば、草履とりから関白まで、秀吉は「縮」の方法でいったがその時は強かった。しかし天下統一した後、巨大意識をもちはじめ、「拡がり」を志向した途端に判断力を喪失し、朝鮮の役という誤算を犯すことになったのだ。

イーはさらに論を展開して、秀吉と同じことを日本の現代史、太平洋戦争でも繰り返えされていることを指摘している。太平洋戦争の初期には、日本軍は包囲戦法で連勝する。しかしその戦法が見抜かれて連合軍の新しい戦略に敗れていくが、日本軍は依然として同じ包囲の詰め戦法を繰り返し、その結果連敗を重ねる。真珠湾奇襲とか神風のような体当たり戦法はよく使ったが、それは相撲で言えば一瞬の「押し出し」のような技で、西洋のレスリングのように何度転がろうと、両肩さえつかなければよい試合では、あまり役に立たない。真珠湾攻撃そのものの発想が、スキをつき一瞬の一撃で勝つという日本の剣術と相撲から出た発想である。しかしその土俵があまりにも広すぎた。盆栽の模様木を地平線に見える平原に植えようとするときに、日本はいつも大きな過ちを犯すのである。

以上は、イー・オリョンの日本人の島国という狭い空間環境・物理的地理的空間が、日本人の文化社会的背景として、日本人の行動を左右する有力な資源となっており、とりわけ中国大陆のような広大な空間を前にすると、どのように対応したらよいかに戸惑う国民性を見抜いた一つのユニークな日本人論である。

*** 罰の与えかた―屋外へ追い出す**

イーの指摘した日本人の広い空間への恐怖的感觉は、日本人の親の子どもに対する罰の与えかたに典型的な例をみることができるのではないか。日本の家庭では、子どもが約束を破ったり、間違ったことをしたりした時の罰の与え方として「家から出て行きなさい」「家に入れません」と言って、屋外へ出される。子どもの方は、「もう悪いことはしませんから、家に入れてください」と言ってわびる。他方、西欧の場合はどうか。これと全く逆で、家の中の狭い部屋や納戸のようなところに「閉じこめる」のが一般的であるという。狭いところに閉じこめられるのが、子どもにとっては恐ろしい体験になる。

個人的な体験としても、アメリカ人のタレントであるケント・ギルバードは、将来アパート経営で生活できるようにと、アメリカにアパートを何棟かを所有する計画を持っていると話していたが、本人の住宅をみると、なんと荒野の一軒家が正にポツンと建っているではないか。周りには全く住宅はなかったので特に印象があり記憶に残っている。もうひとり外国人のタレントであるイーデス・ハンソンさんは、確か人里離れたそれこそ山中に住居を構えていたと思うが、彼女は、周りに家がなく緑の中に星が見えるような夜景の中で暮らすと落

ち着くのだという。彼女は、インドのこのような環境で育ったことが背景にあると自分で語っている。

* 対人距離・対人空間

・距離感

オイルショックが始まった頃、ガソリンの値段が上がって騒いだことがあったが、日本から比べるとリッター当たりの値段がかなり安かったが、アメリカでは高いと言って大いに問題になっていた。これは実際の生活環境を実感できないと分からない問題なのである。つまり、彼らの国土は広く日常の車による移動距離は、おそらくは日本人の3倍の距離は走っているであろう。その際のガソリンの消費量を考えると、ガソリンの値段が少しでも上がると生活に響くのが理解できる。ガソリンスタンド（英語ではギャス・ステーション）のメータの数字は、リットルではなくガロンであり、リットルではメータの単位としては小さ過ぎて桁が多くなり実用的でない。1ガロンは、約3.8リットルであるから、大体4倍くらいの距離感覚といってよいように思う。

同じことは、容器を見ても理解できる。アメリカのスーパーなどで、牛乳ビンの大きさに度肝を抜かれた、これも測ったことはなかったがおそらく日本の3～4倍にはなっている。かれらの生活は、週末に1週間分の生活物資をまとめ買いするので、容器などもこのような生活に合わせて出来ているのであると思われる。走る距離も馬鹿にならないので、まとめ買いする合理性が背景にある。

ついでながら、アメリカの距離感は狭い島国のわれわれからすると全くスケールが違うと言わざるを得ない。つまり、日常的に車で走る距離が日本の場合と比べて多い。だからガソリンの消費量もそれに応じて多くなる。あらゆる点で空間や距離の規模が違っている。スーパーの駐車場なども大変広く、車まで百メートルぐらいあることもざらである。それに1週間分の日常生活物資も多いので、これを駐車場まで運ぶのは大変と思っていたら、それをカートに入れて車まで行き、カートは元の場所へ戻さずに帰ってしまう。カートに戻すには距離がありすぎるからである。店員はこれらのカートを集めて元の場所に返す。そのために多くのカートをつなげて集めやすいようにしてあったのを思い出すが、日本でも早速これを模倣した。

街の中の通りの長さにもびっくりする。例えば、ロスアンジェルスに日本の観光客がよく行ったサンタモニカ海岸に至るサンタモニカ通りは、10キロメートル以上はあるし、同じロスのウィルシャ通りなどももっと長い。著者の住んでいる仙台市の目抜き通りである東一番町は、せいぜい1キロメートルである。12月の末にミシガンを訪れたとき、少し高いところから通りを眺めたら、遙か地平線までその通りが続いており、地平線は空と接していた。まわりをみても山は全くみえず、どんよりした曇り空が果てしなく広がっているのをみて、暗い気持ちになったのを思い出す。

* 対人恐怖症の日本人

対人恐怖症は、日本において発生頻度の高い神経症である。この呼び方自体が日本人の発想によるものであり、西欧にはもともと存在しない名称である。対人恐怖症は単一の症状や病名をさすものではなく、いくつかの類似した症状をまとめているもので、赤面恐怖、視線

恐怖、表情恐怖、醜貌恐怖、体臭恐怖などの症状がふくまれている。

視線恐怖症は、西欧においてはもとより、東洋（台湾、香港、タイなど）においても文献にない日本人固有の訴えであるとみられた。そこで笠原嘉は、これを英語で紹介するのに *fear of eye-to-eye confrontation* の英訳をあてたという。またこれを紹介した際に、欧米の人たちから受けた反論は、なぜ目と目がぶつかる困るのかと（井上、1982）。したがって、西欧人には理解しがた日本人特有の症状だということになる。これは文化の問題といえ、この差異は、視線の交差を恐れない西欧の「視線交差文化」に対して、日本の文化が「視線回避文化」と特徴づけられる社会的背景があるからと指摘されている（井上、1982）。

この視線恐怖症は、「見られる恐怖」と「見てしまう恐怖」の二つが区別されている。前者は、他人に見られていることを意識した瞬間から、心が硬くなり動きがとれなくなる。人前であがるという状況もこの種の心理であるが、この心理はひとが日ごろ経験しているようなものから、それが高じてくれば、こわくて人前にも出られない、不安で仕方がない状態に陥るものまであり、比較的分かりやすい症状である。

これに対して、「見てしまう恐怖」はなかなか分かり難い。これは自分の視線を自分の力でコントロールできなくなってしまう、自分変な目つきをしているから人を不快にしていると恐れる。この症例はいろいろであるが、井上は次のような経過を取るとまとめている。①人前で自分の目がひとりで動く。②自分の視野のなかにたまたま入ってきた人物のほうへ視線が動き、そのとき奇妙な目つきになる。③そのために相手に不快な感じを与えたり、あるいは傷つけたりする。④だから、できるだけ人前に出ないようにする（井上、1982）。

* 目の置きどころ

西欧の人びととくらべ、日本人は視線を回避する傾向のある社会的性格をもっており、この特徴は「視線回避文化」と名づけられている。日本人は、相手を見据えたり、ジロジロ見たりするのを避ける傾向がある。挨拶をする際、お辞儀をする習慣はこの視線回避にうまく役立っているようにみえる。西欧の人びとは、挨拶のときには視線を交え、握手する習慣からすれば、やはり異質性をもっているといえる。

そのせいであるためか、バスや電車の中で向かい合って座席をとったとき、目のやりどころ・置きどころに困っている人は、日本人には多い。この視線回避が、西欧の人から誤解される一つの理由になっている。西欧の人びとは、相手を正視しないとそのひとをマイナスのイメージで理解するように見える。例えば、アメリカのスタンフォード大学生に写真で印象を調べた調査がある。サンプルに使用された女性の目が、直視、横目、下方視になっている女性の第一印象を調べたところ、下方視の女性の印象が悪く、「機敏でない」「弱い」「恐れている」「恥ずかしい」「不安」「拒否的」「興味がない」「陰気」などの印象をもたれていた。

このように、西欧の人たちの間には、相手と会話するときには、相手を正視して話すいわゆる「視線交差」が、一般的な常識的な言語によらないコミュニケーションの手段になっているのである。

電車・列車などの公共的乗り物において、日本人はよく寝ているひとがみられるが、西欧ではあまり見かけないといわれている。とくに西欧の女性は、乗り物の中ではしっかり目を見据えている。このような行動の説明として、他人の前では眠っているような自分の顔を他

人に見せたくないこと、また持ち物を奪われる可能性があるのも、それをしっかり保持しているのだ、というのがある。日本の国は、安全性が高いという国際的評価が高いのであるが、日本人が居眠りしているひが多いのは、このような社会的・文化的背景が関係しているといえるかもしれない。

これは著者がアメリカで生活していた知り合いから聞いた話であるが、視線交差文化の代表格であるアメリカで、日本の政治家で評判が良かったのは、今もご健在である中曽根康弘元総理であったそうである。彼は当時の日本人として背が高くしかも背筋がピンと伸びて姿勢がよく、大きな目で相手を正視するだけでなく、ハッキリと意見を述べるので、評判が良かったそうである。他方、同時代で評判が良くなかったのは大平正義（故人）元総理であった。彼は目が細くて、開いているのか閉じているのか分かりにくい上に、「アー」「ウー」という間の多い話し振りをされるからであった。

* 白ポスト：悪書追放

都市環境における日本人の空間感覚の特徴的なものの一つとして「白ポスト」問題がある。これは1960年代から10年間ほど特に話題提供した主張である。いわゆる「悪書」と言われるヌードグラビア・写真、記事「エロマンガ」を初めとする有害図書を未成年者に見せないようにする運動で、大人が見た後は、自宅に持ち帰らない、あるいは自宅に置かないで、駅前、バスターミナル、空港、フェリー港などに、白く塗ったポストを設置し、それに入れてもらい、悪書から子どもや家庭を守るという運動である。この運動は、一部の宗教団体、自治体、商店街の人々の中から始まり広がっていったものであった。1980年代には撤去されたりして余り見かけなくなっているが、一部には残っているというひもいる。

「18禁」といって18歳未満の青少年には有害なので、映画・テレビ・ビデオなどを自治体の条例によって禁止していることもあり、未成年者に悪環境を提供しないようにしようという考え自体は良いのであるが、問題は未成年者がかなり自由にそのような資料に触れたり、買えたりする方は、一向に改善されない。

自動販売機から未成年者にタバコを買えないようにするために、「タボス」カードを発行したこともあるが、この効果はその後どうなっているだろうか。未成年者に見せたり買ったりできないようにするには、一番問題になっている自動販売機を廃止することだと言えるのであるが、タバコの自動販売機を撤去しようとしたとき、著者の記憶によれば、青森の業者だったと思う。タバコはそうでなくても売れ行きが減少しているのに、これまで撤去しては死活問題だというわけである。

未成年者に経験させることが有害であると考えるのであれば、それを回避する具体案が伴わなければ達成できないのに、この方法論になると、現実的でない、本質からそれたちぐはぐな対策を打ち出すことには、どうやら日本人、日本文化的背景が首をもたげるようである。著者のアメリカでの経験をあげると、レストランでもアルコールのライセンスは別のように、お酒は置いていない店もあり、置いていないが客が持ち込んで飲むのはかまわない店もあるかと思えば、持ち込んで飲むことは拒否される店もあり、店によってさまざまである。日本ならレストランは飲食店では必ずお酒は飲めるが、アメリカではそうはいかない。アメリカの大学ではビールも飲めるが、未成年の学生は飲めない。ある大学の例だが、ホールの入り口の係がおり、飲めるひには手のひらにボンと判を押してくれ、カウンターでそれを示せ

ば飲ませてくれるのである。日本の大学では、アルコール類はその他の販売をするには、いろいろ規制があるようだが、未成年者とそうでない人のチェックはあまり厳密ではないであろうし、取り締まりも徹底しているとは言えない。なぜアメリカは厳しいのかというと、違反すれば、すぐ通報され、営業停止などの罰を受けるからだということも徹底している性であると思える。

* 行列病

アメリカの作家 J・ハーシーは、このような人口増加問題を先取りした小説『もっと場所がほしい』(1975)を書き、世界は人間で埋まり、社会は完全に全体主義に陥り、図書館も公園も行列しなければ入れず、なかでも最大の行列は“みどり”と呼ばれる開放地の博物館で、草原を窓越しに一目見るために、一日中待つ有様となる。食品・タバコを得るのにも、転職するのにもその嘆願のために行列しなければならず、子供を一人もつのにも3年間に17回も陳情書を書く羽目になる社会となるお話である。

都市の人口密度が高くなればさまざまな社会問題をもたらすと心配されるが、私は何かを買うために並んで順番を待つというのが殊のほか苦手で苦痛である。最近の都市生活では評判の良いものを買うのに長い行列ができて、あまり苦しんでいるようにも見えない光景が展開されているようになっている。田舎育ちのせいかどうかにも馴染めないが、外国では行列はごく当たり前の現象であるようだ。

イギリスでの経験によれば、たかがアイスクリームを買うのに長い行列ができていた。私は珍しい光景だと思って写真に撮っていたら変な目で見られたが、人の集まる美術館、博物館、レストラン、遊園地などいたるところで長い行列ができるのは日常現象である。

フランスの美術館美術館で疲れたのでレストランで一服とおもい行ってみると、入り口には長蛇の列できており、自分の番が車で30分以上もかかることも稀ではないし、ベルサイユ宮殿に入るときも長い時間待たされた。観光客が予想以上に多くて入り口が混雑しても、ほかの人が飛んできて手伝うようなことはない。ゆうゆうとしたものである。

日本人から見ると時間が非常にかかるのは、頑なに順番を守る姿勢にある。日本の場合、前の人がもたもたして品物選びに時間がかかっていたりすると、店員はこの人を無視して「はい、つぎのひと」などと言って、次のひとの注文をとったりするが、このような“失礼な”ことは決してしないで、前のひとが終わるまで辛抱強く待つのである。

このような行列が長引く理由には、店員のお釣りの出し方の違いもある。足し算式でお釣りをだすからである。例えば千円を出して450円の物を買うと、店員は「はい、500円、600円、・・・、はい、千円」と合計額が千円になる形で、おつりがもどってくるしかけで、時間がかかる。日本のように「はい、550円」と一回でおつりが戻ってくるわけではない。これも行列が長くなる原因ともなる。

以上、幾つかの日本人的空間センスの行動や事象を取り上げてみたが、この問題は更に美術・芸術などにも関連する話題が広がっていよう。ちょっと考えてみただけでも、例えば「間」「借景」「山水画の遠近法」「浮世絵」「絵巻物」「能の舞台」「盆栽」などにおける日本人特有の空間センスが働いているのを知ることができる。それらについての分析を心理学・行動科学の視点から考察してみるのも面白いのではないか。

文 献

- イー・オリョン (李御寧) 1982 「縮み」志向の日本人 学生社
- 井上忠司 1982 まなざしの人間関係 講談社現代新書
- ベネディクト,R. 長谷川松治 (訳) 1972『菊と刀』社会思想社
- 加藤孝義 1986 空間のエコロジー 新曜社
- 加藤孝義 1997 空間感覚の心理学—左が好き？右が好き？—新曜社
- Mishima, Sumie Seo 1941 My narrow isle: the story of a modern
woman in Japan. John Day company.
- 諏訪治雄 1998 日本人と遠近法 ちくま新書 筑摩書房